



Title	Innocent Empire: Robinsonade and Modernism in the Edwardian Age
Author(s)	高田, 英和
Citation	
Issue Date	2013-10-31
Type	Thesis or Dissertation
Text Version	ETD
URL	http://doi.org/10.15057/25938
Right	

言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 高田 英和 (Hidekazu Takada)
論 文 題 目 Innocent Empire: Robinsonade and Modernism in
the Edwardian Age

本論文は、エドワード朝期（1901-1914）におけるロビンソネイドの不可能性を、モダニズムと帝国主義とのかかわりにおいて解明している。本論文の構成は、以下のとおりである。

Introduction

Robinsonade, Modernism, and Imperialism

Chapter 1

Empire and New Liberalism: Anti-Bildungsroman of D. H. Lawrence and J. M. Barrie

Chapter 2

Who Was Wendy?: Girlhood/Womanhood and Social-Imperialism

Chapter 3

Between Martin Pargiter and Peter Pan: Empire and Innocence

Chapter 4

(Im)possibility of *Peter Pan* of Boy's Adventure Story: New Liberalist Imperialism and the Emergence of Modernism

Conclusion

The Modernized Robinsonade, and Imperialism without Colonies or with Neverland

序章は、マーティン・グリーン (Martin Green) の『ロビンソン・クルーソー物語』 (*The Robinson Crusoe Story*) とフレドリック・ジェイムソン (Fredric Jameson) の「モダニズム

と帝国主義」(“Modernism and Imperialism”)を批評、概説し、本論文の概要とその位置について述べている。ロビンソネイドはリアリズムの系譜であるが、20世紀の初頭に、帝国主義——ウラジミール・レーニン(Vladimir Lenin)の言う、資本主義の最高段階としての帝国主義——に対応して、ファンタジー／モダニズムになり、それは、植民地の表象不可能性の症候であるとしている。

第1章は、モダニストD・H・ロレンス(Lawrence)に焦点をあて、ロレンスがJ・M・バリ(Barrie)の『トミーとグリゼル』(*Tommy and Grizel*)——『ピーター・パン』(*Peter Pan*)の原型とも言える物語——に言及している1910年8月の手紙に注目しながら、一般に教養小説に分類される『むすこ・こいびと』(*Sons and Lovers*)の主人公ポール・モレルの(反)成長を、帝国主義との関係において考察している。その際のポイントは、20世紀初頭、エドワード朝期の帝国が、社会的、文化的言説のレベルにおいて、拡張の終焉に差し掛かっていたということにある。拡張主義を推し進めることが困難になった帝国において、その主体としての個の身体は、以前のように肉体的、精神的に健全な大人に成長して帝国を支えるという予定調和的な物語を、何の疑いもなく受け入れることが不可能になってきており、それを自身の身体で感じたロレンスは、ピーター・パンの原型が描かれている『トミーとグリゼル』の重要性を上述の手紙に記し、半自伝的小説の『むすこ・こいびと』ではピーター・パンと同様にイノセントで成長を拒否するポール・モレルを描いていると、第1章は論じている。

第2章は、『ピーター・パン』に登場する少女ウェンディの行動様式を通して、エドワード朝期に起こったロビンソネイドの変容を考察している。グリーンの述べるように、1900年以降、個性を失い、嘲笑の対象になったロビンソネイドは『ピーター・パン』において終焉し、空想化、幻想化される。それゆえ、ウェンディの少女性もまた、変化せざるをえない。要するに、成長の欠如によって、「家庭の天使」と「新しい女」が対立項ではなくなるという奇妙な事態が『ピーター・パン』の少女性には起こっており、ウェンディの特異性はロビンソネイドにおいて「家庭の天使」が主体化された状態で出現していることにある。そして、この問題は、ロビンソネイドの極点としての『ピーター・パン』において、成長概念に疑問符が付されることと関連している。ウェンディは、20世紀初頭に転回した、維持に重きを置いた帝国主義国家と密接に関係する少女であったと、ウェンディとその直系の娘たちが、帝国植民地と思しきネヴァーランドに途切れることなく訪れ続けるのは、その地と彼女らの生家のあるロンドンとを一つに結び付けることによって築かれる、

帝国の全体性の保持にあったと、第2章は論じている。

第3章は、「英国モダニズム文学のマニフェスト」と称される『ベネット氏とブラウン夫人』(*Mr. Bennett and Mrs. Brown*)において「1910年12月、または、その辺りで人間性は変化した」(“in or about December 1910 human character changed”)と述べたヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf)に焦点をあて、ウルフがこの時期の日記にて言及した『ピーター・パン』における永遠の少年ピーターのように自由に振る舞う『歲月』(*The Years*)のマーティン・パージターの生/性の様式を、エドワード朝期のイギリス帝国主義の構造的な変容——植民地主義的から金融資本主義的へ——との関連性のなかで考察している。言い換えれば、それは、ピーターと同様の行動をとるマーティンが、20世紀初頭の英国における帝国主義に批判的なニューリベラリズムの誕生とどのような関係にあるのかということになる。モダニスト、ウルフが書いた歴史小説の体裁をなしている『歲月』とイギリス児童文学の金字塔の一つである『ピーター・パン』、この二作品に共通する結婚の不在に着目しながら、新たな「成長」概念、もしくは「成長概念」の不在を、帝国主義の終焉とリベラルな国民国家観の誕生というメタナラティブのなかに位置付け、そして、ウルフのマーティンとバリのピーターが提示する、大人の男への成長の拒否、つまり幼児性の称揚という問題が、この時期における「児童文学」の興隆ならびに「モダニズム」の出現と密接な関係にあることを、第3章は解明している。

第4章は、『ピーター・パン』に登場する少年たちに注目し、この作品がイギリス国内と連続的であることを確認しながら、エドワード朝期におけるロビンソネイドの変容を考察している。第4章は、以下の3点、(1)帝国主義批判の議論の登場のなかで、英国のリベラリズムが自由放任主義からニューリベラリズムへと転換すること、(2)いわゆるメインストリームの小説において、リアリズムが終わり、モダニズムが新たな価値として台頭すること、(3)ジェームソンがモダニズムの誕生を帝国主義と関連づけていること、を踏まえ、グリーンが『ピーター・パン』について指摘するロビンソネイドの不可能性を、帝国主義の終焉ではなく変容として読み解いている。つまり、グリーンがロビンソネイドの終焉、不可能性として位置づけようとした想像上にしか登場しない「島」が、ジェームソンの論じる帝国主義文学としてのモダニズム文学における植民地の不可視化とどのように関係しているのかを追及している。その際のポイントは、ジェームソンがE・M・フォスター(Forster)の『ハウズ・エンド』(*Howards End*)に見ているモダニズム構造のように、ネヴァーランドが国内/植民地の入れ子構造になっていることにある。すなわち、第

4章が論じているのは、(1) 『ハワーズ・エンド』と『ピーター・パン』の構造の相同性の指摘、(2) ジェイムソンのその指摘をより具体的に、「帝国の維持」言説の出現とニューリベラリズム言説の誕生に位置づけていること、(3) ジェイムソンの指摘をよりはっきりとさせて、植民地主義型帝国主義から金融資本型帝国主義への変容というパラダイムにきっちり載せていること、にある。

終章は、本論文で追求した事柄を整理し、20世紀のアメリカを中心とする金融帝国主義——現在ではハリー・マグドフ (Harry Magdoff) が「植民地なき帝国主義」 (“imperialism without colonies”) と呼ぶもの——の出発点は、20世紀初頭の植民地主義批判の言説に、その一つの出発点があり、その出発点を『ピーター・パン』は記述しているとしている。